

## 聞き書き

## 日本統治時代を生きた台湾人への面接調査報告

柴 公也 (台湾・朝鮮問題研究者)

筆者が日本統治時代の台湾の社会状況に関心を持つようになったのは、同じく当時の朝鮮の社会状況を調査していたのが発端である。台湾での調査を始める三年ほど前から現在まで(\*2005年頃から2018年頃まで)、休暇を利用して年に3~4回ソウルに出張し、日本統治時代の教育を受けた韓国人の男女約60名との面接調査(\*一度きりというのは少なく、中には10回近く面談している場合もある)を行っている。同時に、国内では日本人の男女約70名の調査も行っている。最初は、韓国だけのつもりであったが、韓国の調査だけでは理解しにくい点が幾つか出てきたので、同時代に日本の統治を受けた台湾、朝鮮と同様な調査に加えたという訳である。

その結果は意外なもので、韓国の場合、当時の日本や日本人に対する不平や不満を述べた者は少数で、大多数は学校時代や日本人との交流のことを懐かしげに語ってくれている。それに対して台湾の場合、親日の台湾として知られているように、日本時代を懐かしむ人がいた反面、当時の日本や日本人に対する反感を露わにする者が、韓国人の場合よりも多かった。この根源的な理由は、建前上、独立国同士の合邦として日本に統合された朝鮮と、日清戦争の結果、戦利品として日本に割譲された台湾との違いに由来しているものと思われる。

まず最初は、当時の台湾人が日本人に対してどのような不平・不満を抱いていたかということ、歯に衣を着せず率直に語ってくれた鄭垠耀氏の例を取り上げることにする。以下に述べられているような氏の抱いていた不満は、程度の差はあれ他の多くの台湾人にも共有されていたものであったということは、現代を生きる日本人としてぜひ留意しておくべきことであろう。

## (1) 二等国民の意地

鄭垠耀 (1924年生) 台中一中卒

私の父は泉州系の閩南人<sup>びんなん</sup>で、子供の頃、三年間ほど漢塾に通ったそうです。その後、台南師範付属の公学校を出て、その高等科に当たる商業補習科(\*二年制)の課程を終えています。祖父は漢塾に通っていたので漢文は出来ましたが、公学校のない時代に育ったので日本語は出来ません。母は、台南の明治女子公学校を出ています。母は纏足<sup>てんそく</sup>をしていませんが、祖母はしております。祖母は漢塾に通ったので漢文は出来ましたが、日本語は出来ませんでした。それで、母は祖母に手紙を出すために、漢塾に通って漢文を習ったとのことでした。

私はこの両親の下で、1924年に台中で生を享けました。七人きょうだいの長男ですが、

上に姉が一人おりました。

父は、商業補習科を終えて内地人の経営する台南のバナナ会社に入り、検査官として勤めていました。それが、私が5歳の時、大陸の天津の支店に転勤になったのです。

天津の家の前には公園があり、その隅にはテニスコートがありました。そのコートで、時折、日本租界にかくま匿われていた廢帝の溥儀夫妻がテニスをしていました。すると、母などは、「皇帝がテニスをしている」と言って、見物しに行っておりました。私も付いて行ったのですが、周りは人の背丈ほどの塀で囲まれていたので、覗き見ることもできませんでした。母は、溥儀夫妻を清朝の皇帝として尊敬していたようですが、私は別に関心がありませんでした。

父は、天津から帰台後、今度は台中のバナナ会社に入り、上海に派遣されました。上海勤務を終えて台湾に戻りましたが、その後、汕頭の支店で終戦まで三年ぐらい単身で総務課長を務めていたとのことでした。

大陸では、台湾人も法的に日本人でしたから、内地人と同様に外国勤務手当が付きました。ですから、父はかなりの高給取りでした。しかも、終戦後、財産を持ち帰れなかった日本人の同僚たちから多量の貴金属を貰い受けていたので、一時は大金持ちになったとのことでした。ところが、いざ父が帰台しようとしたら、国民党に財産を全部取られてしまい、台湾に戻った時は一文無しだったそうです。ちなみに、父から日本の統治に対する不平や不満などは聞いたことはありません。

実は、私には母が二人おりました。もう一人の母は、実母より20歳くらい年下で、私とは4歳くらいしか違いません。父が天津で働いていた頃、母が家事や子供たちの世話をさせようとして、子供売りから9歳くらいの娘を買ったのだそうです。

台湾に連れて来て家事を手伝わせていましたが、16歳頃になると、なんと腹が膨らんできたのです。母は、猛然と怒り狂いましたが、結局は漢族の習慣と諦めたのか、小さい母を女中代りにして家事の一切を任せ、一つ屋根の下で喧嘩することなく過ごしておりました。こうして、父は、私の実母との間に四人、小さい母との間に三人の計七人の子供を儲けたわけです。

小さい母は、台湾では父の若い妾として、また母の下女として生きたわけですから、現在の価値観からすれば悲惨な生涯だったと思われるかもしれません。しかし、極端な話、遊郭に売られて阿片中毒になり、夭折してしまったかもしれないことを考えれば、衣食住を保証されて三人の子供を成人させることが出来たのですから、それなりに幸せな一生だったのでしょう。

私は、公学校は、最初南投公学校に入りました。その後、一年の二学期には社頭公学校に転校しました。三年からは草屯公学校に移りました。校舎は木造の平屋でしたが、講堂もありました。生徒は台湾服に裸足で、風呂敷が普通でしたが、私は学生服に運動靴を履き、ランドセルを背負って通っておりました。私は卒業するまで首席で通し、級長を任されました。

公学校の先生は、皆子供たちを可愛がって教えてくれました。ただ、中学校になると、生徒たちが生意気になるので、内心台湾人を馬鹿にしていると思われるような先生もおりました。公学校を卒業して台中一中に入学しました。草屯公学校からは、高等科を含めて、18人が受験しましたが、合格したのは私を含めて二人だけでした。

台中一中の校舎は、煉瓦造りの二階建てで堂々としたものでした。生徒はカーキ色の学生服に革靴を履き、ズックの鞆を肩に掛けて通っておりました。台中一中は、台湾人によって設立された、台湾人のための中学校でした。一学年三クラスで、一クラス50人くらいでした。中に一割くらい、内地人の生徒が入っておりました。

ただ、日本人の学校である台中二中に受からなかった生徒が主でしたので、皆羊のようにおとなしく、苛めたりはしませんでした。高砂族の生徒はいませんでした。客家人の生徒はおりました。ただ、学校では日本語が共通語でしたので、誰が客家人かは判りませんでした。

当時、台中一中の校長は、猪首で猫背気味の「カメ(\*亀)」という渾名を持つ広松校長でした。カメ校長は、常々「お前たちは立派な日本人になれ」と煽り立てていましたが、上級学校への進学は勧めませんでした。また、二年の時、放課後に学寮にいた五人の生徒が「月が鏡であったなら、恋しあなたの面影を夜ごとうつして見ようもの、こんな気持ちでいるわたし、ねえ〜〜〜」という歌詞の、渡辺はま子の「忘れちゃいやよ」を歌っていたのがバレ、思想が退廃的だという理由で操行が「丙」に落とされ、全員落第させられたという事件もありました。

ある時、台湾人の生徒が内地人の生徒に対して、「スーカウア(\*四つ脚)」と陰口を叩いたことがあります。それがカメの耳に入り、その台湾人の生徒を呼び付け、「大和民族に対して『四つ脚』とは何事だ」と叱り付けたのだそうです。カメは普段、「民族の違いは問題ない」と、「一視同仁」や「内台一如」とやらを唱道していたのですが、思わず馬脚を現してしまったという訳です。こうした言動のため、カメ校長は、生徒からは忌み嫌われていたのですが、官位が勲四等だったため誰も諫言できず、カメの恐怖支配が続いていたのです。

その後、田中校長に代わったのですが、ある日、田中校長が、「これからは受験指導を徹底して進学に力を入れる」と話したところ、同じ日に前任者のカメ校長が現れ、「進学目的の教育は本当の教育ではない。皇国精神さえしっかりしていれば、それで充分だ」と一席ぶち、「台湾人には高等教育は不要」という本音をさらけ出したのです。カメ校長からは、自分たち台湾人は日本人ではあるが、しかし二等国民であるという事実を何度も確認させられておりました。

ただ、私が最初に二等国民だと実感したのは、公学校の六年の時のある日の出来事が切っ掛けでした。それは、ある日、友達と道を歩いていると、剣道の稽古を終えて自転車であたちの側を通り過ぎた内地人の三、四年生くらいの小学生たちが、竹刀で我々の頭をバンバンと叩いて笑いながら逃げていったのです。その時、「ああ、自分たち台湾人は内地人に馬鹿にされている」と痛感したのです。

また、中学の五年の頃、用事があって派出所に向いたことがありました。すると、先に歯医者さんがいて、内地人の巡査に判をもらっていたのですが、巡査は申請書に判を押すと、それを頭も上げずにポイと投げてよこしたのです。それを目の前で見ていて腹が立った私は、巡査が申請書に判を押すと、それを手にして挨拶もせず派出所を飛び出そうとしたのです。すると、呼び止められて、「おい！待て！なぜ礼をしなかったのか。お前が何を考えているかは解っている。報告してやってもいいんだぞ！」と脅されました。仕方なく、平謝りに謝ったので、なんとか報告されずに済みました。

ある日、父と叔父たちが集まって、改姓名の話をしていたことがあります。私自身は、別にしたいとは思いませんでした。ただ、改姓名をすれば配給が内地人並になるし、子供の進学の際にも有利に働くと言われていましたから、級友の中にも改姓名をしたものがありました。何でも、「大山」という姓にしようということだったらしいのですが、改姓名の条件を満たさなかったのか、結局、「鄭」のままでした。

中学を卒業して経済学を専攻したいと思い、台北帝大の予科の文科を受けましたが、落ちてしまいました。仕方なく、浪人して台南の末広公学校の代用教員を務めることになり、四年の男子組を担当しました。月給は47円でした。

当時、台湾人が上級学校に進学するのは難しく、針の穴を潜るようなものでした。実際、台北帝大の予科は、台湾人の場合、40人受けて合格者はたったの一人だけだったのです。台湾人が高等教育を受けたかったら内地へ行け、というのが総督府の方針だったのでしょう。

ある日、派出所に呼ばれて、「お前は海軍に志願するんだらう。だったら早く判子を押せ」と言われました。「私は浪人しているので、志願はしません」と答えたところ、「浪人している学生は優秀だから早速出頭せよ」と言われたのですが、結局耳の検査で落ちてしまいました。その時は嬉しさの余り、大声で「万歳!」と叫んでしまいました。

また、台南駅で切符を買うために、台湾人が列を作って並んでいた時のことですが、人が多くなったので列が崩れてしまいました。すると、二十歳ぐらいの内地人の駅員が出て来て、「きちんと並べ!」と言って、手に持った竹竿で列を乱した者の脚を叩き付けながら並ばせておりました。

このように、台湾生まれの内地人(\*湾生)には、台湾人を露骨に馬鹿にしているような者もおりました。ただ、私は日本や日本の文化は嫌いではなく、むしろ好感を持っておりました。天皇についても学校で教えられた通り、「現人神」と思っていました。三週間の内地への修学旅行で解ったのですが、内地の人たちの親切さも実感していました。しかし、湾生の中には傲慢な者も少なくなく、台湾人の反感を買っていたのです。

ただ、何の罪もない若い男や女が、軍隊や官憲に無理やり連行されていったとかいう噂は聞いたことはありません。当時の行政機構からして、そのようなことは有り得ないことでした。

終戦の年の二月ごろ、道端で一枚のビラを拾いました。見ると、それは台湾人に「カイロ宣言」の内容を知らせる、以下のような宣伝ビラ(\*漢字は新字体にしてあるが、原文のまま)でした。

### 《台湾の将来

ソロモン会戦以来、敗退に敗退を続け、今や大東亜の心臓部であるマニラさえ失うに至り、その上日本本土初め台湾の軍事施設に対して米空軍は殆ど連続的空爆を敢行している。

日本政府が如何に好言麗辞を並べ、所謂大戦果を報道しても今後日本は急速に衰微し、必然的に台湾より後退を余儀なくされるのは既に衆人の等しく認めている処であり、賢明なる同胞諸君も充分悟って居られる筈である。

然らば今後の台湾はどうなるであろうか。

二年前、カイロで行われたルーズベルト、チャーチル、蒋介石の三巨頭会議は、昭和十八年十二月一日附けを以って、所謂「カイロ宣言」を公にし、日本の侵略主義帝国主義を排除し、朝鮮を独立させ、台湾を中華に還し、以って各民族の自由幸福を計るべしと発表している。

台湾にも黎明が訪れ、自由に我々の言葉を語り、我々の文化習慣を堂々と表示できる日は遠くあるまい。

六百万同胞よ、我々の民族のために闘争し、尊い犠牲となった数多の諸先輩を思い出せ!!

銘記せよ! 「カイロ宣言」

元高雄在任一海外同胞より》

ビラを拾って読んでみましたが、最初は半信半疑でした。しかし、戦局の推移を考えてみると、確かにビラに書いてあるとおりでしたので、日本の敗戦を覚悟するようになりました。

当時、供出というのがあって、穀物類や金属類を提供させられるようになりました。米や金銀などは提出すると、それに見合うだけの対価が支払われました。私の母は、仕方なく金の腕輪を供出しましたが、さすがに名残惜しそうな様子でした。また、穀物や肉類、砂糖などの配給というのもありましたが、これらは通帳や切符を持って行かないと購入できませんでした。内地人は、肉類や砂糖などの配給では、食習慣の違いという理由で台湾人よりも優遇されておりました。

終戦時には、台南市役所の社会課の軍人援護会におりました。月給は48円でした。8月15日に玉音放送があるというので、最敬礼して聞いていたのですが、雑音が酷くて良く解りませんでした。後で、日本が負けたと判りましたが、内心ホッとして、これで傲慢な湾生たちの鼻っ柱がへし折られたと思って、内心「ざまあ見ろ!」と叫んだのです。

後で、内地人の課長が来て、私に向かい、「この度、陳と改姓名しましたのでよろしく」と冗談を飛ばしておりましたから、内地人も口には出さないが、戦争が終わったのでホットしていたのでしょう。

私は前から、敵の宣伝ビラを拾って読んでいましたから、その日のうちに、「これで台湾は支那に戻る」と思いました。日本の統治から離れるのは嬉しかったのですが、支那に戻るのは嫌でした。それは、支那は衛生状態が悪く、政治は腐敗していて庶民は貧困に喘いでいると聞いていたからです。それで、初めて独立について考えるようになったのです。しかし、親戚が大陸から帰ってきたので聞いたのですが、台湾は独立する力を持っていないと聞かされ、独立は諦めたのでした。

子供たちに日本時代の話をする但也有りますが、学校では反日教育を受けたはずなのに、別に反駁などはせずに聞いてくれます。息子などは、自分から進んで日本語を勉強していますから、日本に対する反感などは別にないのでしょう。